

## 南宋初期における北方地域の軍事力

——宗澤、杜充と東京留守司——

鄒 笛

## はじめに

10～13世紀の東アジア地域において、中原王朝の宋と遼・西夏・金・モンゴルなどの非漢族政権が建てた王朝との対峙・共存は、その時代の特徴の一つである。だが、その国際関係は静的な構図ではなく、中原王朝を含む各王朝の間では平和と紛争の交代が繰り返されていた。大掴みに言えば、四百年余りのタイムスパンの中で、遼・金・モンゴルなど、宋にとっての北方王朝が徐々に南下をし、最終的には大元ウルスという世界帝国の樹立に至った。これはそれらの王朝が「征服王朝」とされた所以でもある<sup>(1)</sup>。一方の中原王朝の宋からすれば、強力な騎兵軍団を有するという共通の特徴を持つ他民族政権との対峙・共存は、それまでの漢や唐などの時代とは異なる対外関係の構築を意味したであろう。

1004年（北宋景德元年、遼統和二年）に北宋・遼の間に締結された澶淵の盟は、多国共存のモデルを提供し<sup>(2)</sup>、宋遼関係のみならず、それ以後の外交関係の対処にも影響を及ぼした。澶淵の盟が締結されてから百年以上の時期の中、北宋の西北地域（現在の中国陝西省・甘粛省東部）で北宋と西夏との間に断続的に起きた小規模な軍事衝突を除き、各政権の間には基本的に平和関係が保たれていた。軍事的な実力によるものではなく、盟約により定められた一種のバランス状態は、11世紀半ばに至って、東アジア地域全体にまで及んでいた<sup>(3)</sup>。

このバランスを崩壊させる発端は、12世紀初頭に現在の中国東北地域で勃興した女真族政権が建てた金国による遼への侵攻である。遼を滅ぼした金は、すぐにかつての同盟国であった宋に攻

(1) 藤枝晃『征服王朝』（秋田屋、1948年）、田村実造『中国征服王朝の研究』上中下（東洋史研究会、1964・1974・1985年）、笹沙雅章『征服王朝の時代 宋・元』（講談社、1977年）などを参照。

(2) 澶淵体制、あるいは多国体制という概念に関しては、古松崇志「契丹・宋間の澶淵体制における国境」（『史林』第90巻第1号、2007年）、『草原の制覇：大モンゴルまで シリーズ中国の歴史③』（岩波書店、2020年）を参照。盟約締結の形で平和関係を定めた澶淵の盟は、城下の盟として批判される一面もあり、締結当初から現代に至るまで、その性格や影響、意義などをめぐる議論は途絶えず行われてきた。詳細は陶晋生『宋遼関係史研究』（聯経出版事業公司、1984年）、張希清等主編『澶淵之盟新論』（上海人民出版社、2007年）などを参照。

(3) 古松崇志「10～12世紀における契丹の興亡とユーラシア東方の国際情勢」（『アジア遊学160』契丹〔遼〕と10～12世紀の東部ユーラシア』、勉誠出版、2013年1月）を参照。

め込み、1126年（北宋靖康元年、金天会四年）の冬、その首都の開封を陥落させた<sup>(4)</sup>。翌年の春、太上皇徽宗・皇帝欽宗をはじめ、北宋の皇室、中央政府の高位官僚を、首都で集められた財貨とともに、金国に連れ去った。靖康の変と呼ばれたこの事件は、宋王朝の歴史の分水嶺となり、澶淵の盟以来の多国体制を崩壊寸前まで追い込んだ。

南宋政権の成立は、多国体制の徹底的な崩壊に歯止めをかけたと言える。開封が陥落する間際、たまたま人質も兼ねた使者として開封を離れ、金軍に連行される運命を免れた康王は、欽宗皇帝の命令を受け、兵馬大元帥として軍隊募集・指揮の権力を与えられた。そして、徽宗・欽宗が連行され、政権中枢が真空状態に陥った後、自ら皇帝として即位した。しかし、北宋末に正規軍の崩壊がもたらした混乱は簡単にはおさまらず、一方の金軍も侵攻を止めたわけではないため、南宋初代皇帝の高宗は、即位当初から非常に緊迫した内外情勢に直面していた。結果的に言えば、南宋の政権再建は成功し、ほぼ一世紀半にわたって存続して、金国とその後のモンゴルに対峙したが、首都を含む旧北宋領の三分の一以上の国土を放棄し南方へ移ったため、「江南政権」と位置付けられてもいる<sup>(5)</sup>。要するに、南宋政権の確立とその後の存続は、軍事行動に対して消極的な態度を取り、専ら金軍との和議を求め、「政治的妥協」を代価にはじめて実現できたという印象がほぼ定着したといえるだろう<sup>(6)</sup>。

ところが、北方地域の領土の放棄、金軍の和議条件の受け入れなどは、確かに政権中枢による政策決定だが、その結果を左右するのは政策決定層の意思だけではなく、目まぐるしく変化する戦局でもあった。すなわち、南宋初期の政策決定は、当時の戦況への対応という性格がきわめて強いのではなからうか。このような傾向は、政治秩序の再建に重心を置いた宋以前の王朝とは異なっており、さらには「五代の弊害を正す」ことを意識していた北宋初期とも異なっている。この現実には、政権中枢の政策決定過程のみならず、南宋初期の軍事力の状況、とりわけそれと金の騎兵軍団の実力との比較に注目する必要性を示唆する。

北宋の滅亡は、金軍の攻勢に対応する中で正規軍が崩壊した結果でもあったため<sup>(7)</sup>、これま

---

(4) 金の遼への侵攻や、その後の北宋への侵入の背景には、遼・宋・金三国の関係の葛藤があり、詳細は沈起煒『宋金戦争史略』（湖北人民出版社、1958年）、趙永春『金宋関係史』（人民出版社、2005年）、外山軍治『金朝史研究』（東洋史研究会、1964年）、拙稿「北宋末の太原戦役の再考—北宋滅亡の軍事過程について—」（『東洋学報』第101巻第2号、2019年9月）などを参照。

(5) 寺地遵『南宋初期政治史研究』（溪水社、1988年）は、南宋初期の「政治過程」に注目し、南宋政権の保守性を指摘した上、その性格を「江南政権」として位置付けた。同様に南宋政治史を研究対象として扱う何忠礼『南宋政治史』（人民出版社、2008年）は、南宋政権の江南地域での展開を政策決定層の金軍に対する恐怖心による南方への撤退とし、批判的に見ていた。

(6) 宋代を通しての政治史・軍事史研究の中、北宋初期以来の軍事政策と軍事方針に結び付け、宋王朝の軍事的軟弱や軍政腐敗などの問題を軍事行動の敗北の根本原因とする視座は、とりわけ中国の宋代史学界では近年まで強調され、その代表として、王曾瑜『宋朝軍制初探』（中華書局、2011年増訂本）、何忠礼『宋代政治史』（浙江大学出版社、2007年）、前掲注(5)『南宋政治史』などが挙げられる。なお、それに関連する先行研究の状況は、拙稿「北宋防衛体制の変遷：研究状況概要」（『史滴』第40号、2018年12月）を参照。

での研究では、南宋政権にとっての、軍事力の再組織、及び正規軍以外の地方武装勢力の吸収が課題となってきた。この点について、主に金軍の侵入を直接受けた地域で蜂起する「義軍」の活動や、南宋朝廷のそれらの武装勢力に対する吸収に先行研究はすでに注目している<sup>(8)</sup>。そうした中、旧都開封が所属する京畿路、及び河東・河北両路（いわゆる両河地域）で活躍する宗澤も、その地域（以下、北方地域と称する）の軍事力の収束と地域の経略に努めていたリーダー的な存在であった<sup>(9)</sup>。当時、各地に自発的に金軍に抵抗する「義軍」などの地方武装勢力が多数存在しており、さらに宗澤は大量の軍事力を開封に集め、朝廷に対して開封へ帰還するように再三進言したにもかかわらず、南宋朝廷はその状況を見捨て、江南地域にまで「撤退」した。一見すれば、このように軍事力の角度から見ても、やはり「撤退」の原因は政策決定層の「保守性」、あるいは金軍に対する恐怖心であり、結論はまた振り出しに戻ったかのように見えるが、そこに実は大きな問題が潜んでいる。

すなわち、義軍を含む北方地域の軍事力は必ず宋王朝の力になる、という宗澤の見解に対して、朝廷はなぜ支持しなかったのか。さらに言えば、それらの軍事力の立場や実力は如何なるものだったのか。また、強力な騎兵軍団を誇る金軍を相手に、北方軍事力は如何に実力を発揮し、如何に当時の朝廷正規軍と連携するのか、などの疑問である。これらの問題点は、いずれも軍事行動の結果に関連し、最終的には政策決定の結果につながるが、その点について、今までの研究は殆ど触れていない。

このような現状を受け、本文は、北宋滅亡間際から南宋政権成立直後までの間の北方地域の軍事状況を検討する。具体的には、北方軍事力の中でリーダー的な存在であった宗澤の活動、及び軍事力の収束を務めとした東京留守司の発展を手がかりに、北方地域の軍事力の構成・性格・立場を明らかにし、そして中央政府が彼らの存在を如何に認識し、その認識は北方地域の放棄という結果に如何につながったのかといった問題を解明する。この検討は、領土回復に対して「消極的」とされた南宋政権の性格や、その成立が武装勢力の動向に左右されたことの理解、ひいては

(7) 前掲注(4)拙稿「北宋末の太原戦役の再考—北宋滅亡の軍事過程について—」を参照。

(8) 陶晋生「南宋利用山水寨的防守戦略」(氏著『宋遼金史論叢』、中央研究院聯経出版公司、2013年。初出は『食貨月刊』復刊第7巻第1・2期、1977年4月)、黄寛重『南宋時代抗金の義軍』(聯経出版公司、1988年)、同氏『南宋地方武力：地方軍与民間自衛武力的検討』(国家図書館出版社、2009年)などが挙げられる。また、劉子健「背海立国与半壁山河の長期穩定」(氏著『南宋史研究彙編』、聯経出版事業公司、1987年。初出は『中国学人』、1972年第7期)も、「吸収」というキーワードを強調し、軍事面の措置を含め、南宋政権成立期の政治を「包容政治」とした。なお、義軍のほか、盗賊集団の吸収も南宋軍事力の成長につながったと、山内正博「南宋鎮撫使考」(『史淵』第64巻、1955年2月)が指摘した。

(9) 宗澤の活動は南宋初期の歴史の中では重要な問題であり、前掲注(6)王曾瑜『宋朝軍制初探』、何忠礼『南宋政治史』、注(8)黄寛重『南宋時代抗金の義軍』などの著作に言及された。とりわけ、王氏は宗澤が開封に大量の軍事力を集めたことを強調し、それがあつたにもかかわらず、南宋統治者は北方地域の放棄を選んだことを強く批判した。この点については、同氏「宋高宗和李綱・宗澤」(『中国文化研究所学報』新第6期、1997年)にも触れられた。

12世紀の東アジア地域に関するより深い理解につながると思われる。

## 第一節 分岐：「忠臣」と「統治者」の認識の温度差

北宋の首都が金軍に落とされた際に、欽宗皇帝の異母弟である康王は、和議のために派遣された使者として、河北路を経由して北上している途中であった。黄河を渡り、河北路の相州などを経て磁州に到着した時、知磁州の宗澤に、北上を強引とも言えるほど強く引き止められたため断念した。父兄のように金軍の俘虜になることを免れた康王は、磁州の南にある相州へ戻り、北宋末に金軍との各戦闘の中で敗北し、あるいは逃散した将領・兵士も徐々にその下に集まってきた。

両浙路義烏（現在の中国浙江省義烏市）出身の宗澤は、元祐六年（1091）に進士及第した後、大名館陶尉・衢州龍游令・晋州趙城令・知萊州掖県・登州通判などを歴任し、靖康元年に知磁州に就任した。康王一行を引き止めたことで、功績を挙げたものの、康王をはじめとする大元帥府の成立後は、両者の対立が次第に表面化していった。本節はまず、その分岐が生じる経緯に注目し、宗澤及びその背後の武装勢力と康王（高宗）集団との葛藤を明らかにする。

宗澤と康王集団との対立の原因は、行在の開封帰還と両河地域の回復をめぐる両者の考えの食い違いにあった<sup>(10)</sup>。しかし実際、史料の記述によれば、その対立の発端は、磁州で発生した康王一行の北上中止にあった。この事件の詳細について、李心伝『建炎以来繫年要録』（以下、『要録』と略称）は以下のように述べている。

辛巳、王は磁州に到着した。義烏出身で知磁州の宗澤は、「（現に）肅王は金に行って帰らず、（しかも）今、敵はすでに（開封に）迫り、大王が行っても転機を得ることはできないでしょう。むしろしばらくここに留まった方が良いでしょう」と言った。康王はそれに従おうとしなかった。磁州の人は（副使の）王雲が不誠で、康王を連れて金に行こうとしたとし、壬午、王雲を捕らえて彼を殺した。<sup>(11)</sup>

この事件は康王にとって、金軍に連行される運命を免れた契機であったため、彼が即位した後、磁州で起きたこの事件をめぐる史料の記述には様々な政治的意味が込められた<sup>(12)</sup>。李心伝はこの事件を述べた際、宗澤は王雲との間に過去の恨みがあり、あえてその機会を狙って王雲に復讐したという説を採用しなかったが、いずれにせよ、康王の目の前で、副使の王雲が殺されたということは動かぬ事実であった。その後の行動により宗澤の忠心は明らかとなるが、当時の康王の立場からすれば、王雲より、むしろ最初に宗澤の勧告に耳を傾けなかったのは康王自身だったこ

(10) 同注(9)。

(11) 『要録』卷一・靖康元年十一月辛巳。「辛巳、王行至磁。磁守義烏宗澤曰、『肅王一去不返、今敵騎已迫、大王去、無益於事、不如且留。』王未之聽。磁人以王雲為不誠、將奉王入金、壬午、執雲殺之。」

(12) 鄧小南は「関于『泥馬渡康王』」（氏著『朗潤学史叢稿』、中華書局、2010年。初出は『北京大学学报（哲学社会科学版）』1995年第6期）の中で分析を加えている。

とが問題となっただろう。こうした中、王雲の誅殺は康王にとって紛れもない衝撃、ひいては脅威となっただろう。その証拠に、北上こそ諦めたが、康王は磁州に留まることなく、磁州の南にある相州に戻った。また、かつての恐怖感は、歳月が経っても消えず、十年後の紹興五年（1135）になっても、当時のことを語る高宗の言葉から、王雲の死を通じて、宗澤に対する複雑な感情が窺える。

戊子、史館から「宗澤の行状と汪伯彦などが編纂した元帥府事跡（の記録）を照らし合わせ、記録して奉り、陛下の可否をいただいてから、史官に交付するようお願いいたします」という上奏があった。陛下は、「過去に使者の任務のために河北に行き、それから今まですでに十年経ったが、当時のことは今だにはっきりと覚えている」と言った。趙鼎らは「私が聞いたところ、かつて宗澤は陛下に河朔に行かないように進言したようですが、それは本当のことでしょうか」と聞いた。陛下が言うには、「確かにそのようなことがあった。しかるに王雲の死は、磁州の人が彼は（金人の）間諜ではないかと疑って殺したので、宗澤に非がないとは言えない」と。<sup>(13)</sup>

趙鼎との会話から、王雲にかけられた疑いはただの誹謗だったと、高宗は確信していたということが分かる。実際、高宗は建炎二年（1128）二月に、金との戦争はまだ継続していた状況の中、任命された使者が出発を躊躇していたという報告を聞き、王雲の「忠義」に称賛の意を示した<sup>(14)</sup>。歳月が経ても記憶に強く残っていたのは、出使の経験そのものより、むしろ宗澤が「正確な主張」を貫くために行った、脅迫に近い行為が残した恐怖感ではなかろうか。

また、宗澤と高宗との認識の食い違いは、金国の使者に対する態度にも表された。高宗が即位してまもない建炎元年（1127）六月に、金の使者である牛大監等八人が金に立てられた張邦昌の楚に出使するという名目で、開封にまでやってきた。知開封府に任命されて間もない宗澤はすぐに東京留守の范訥に建言し、金使を縛り上げて拘束させた後、はじめて朝廷に報告した<sup>(15)</sup>。事前に朝廷に報告せずに金側の使者を拘束するのは、強硬な個性を持つ宗澤の主戦態度の徹底さのあらわれではあったが、独断とも言えるその行動を、朝廷は如何に受け止めたのか。金の使者の拘束をめぐる高宗と宗澤とのやりとりを、『要録』は以下のように記している。

これに先立ち、高宗は京城留守の宗澤に、拘束した金使を別の（使）館に泊め、もてなしをするように命じた。宗澤が言うには、二聖はまだ金国にいるため、もし敢えて（金使の）誅殺を行ったら、お二人に困らせる事態を招きかねない。しかし金使を釈放してそのまま帰

(13) 『要録』卷九十三・紹興五年九月戊子。「戊子、史館奏、『乞將宗澤行實与汪伯彦等所編元帥府事跡参照具録進呈、斷自聖意、付之史官。』上曰、『朕昨以使事至河北、逮今十年、當時事歴歴可記也。』趙鼎等曰『臣聞澤嘗勸陛下勿為河朔之行、信否？』上曰『誠有之。然王雲之死、乃邦人疑其為奸細而殺之、澤不為無過。』」

(14) 『要録』卷十三・建炎二年二月丁丑。

(15) 『要録』卷六・建炎元年六月乙亥。

したら、また国の体面を傷付けるだろう。むしろ（今は彼らを）ここに拘束して、二帝が帰国し、臣民の前に姿を見せて大赦を宣告する日を待ち、その後特別の恩典として釈放するという形の方が良い」と。今（官員を遣わして開封から太廟の木主を行在まで迎えさせるという）詔が下されたら、宗澤は上奏して曰く、「陛下がまた奸臣の言い分を聞き、徐々に和議に期待するようになり、退避逃走を計画するとは思わなかった。…また金使を別の使館に泊め、もてなしをするように命じた。その二、三人の大臣は、なぜ金人に対してそこまで誼みを抱き、国家の長期的な謀りにそこまで冷淡なのか、私には理解できない。私のような素朴な愚か者は、どうしてもその命令に従い、国の軟弱さを見せるようなことができない。…」と。（高宗は）詔で、「卿は悪党を弾圧し、都城を守り、（朕は）とても頼りにしている。ただ金使を拘留することだけは、朕の意にそぐわない」と返事したが、それでも宗澤は従わなかった。<sup>(16)</sup>

この記述に記されたように、高宗から金使釈放という命令があったにもかかわらず、宗澤は二度にわたってそれを拒否した。金との和議、及び行在の南下を一切「奸臣の主張」として激しく非難するという宗澤の態度は、『要録』や『三朝北盟会編』（以下、『会編』と略称）、及びその文集『宗忠簡公文集』に収録された複数の宗澤の上奏文の中では一貫されている。後世では主流になっている、その行為を称賛する見方は、領土回復の大義名分を前提とすれば当然のことだが、高宗から見て、宗澤のあくまで自分の主張を貫こうとする姿勢は、皇帝権威に対する挑戦になるに違いない。ましてや、軍事的にも宋側が劣勢に立たされた時期において、金軍と決戦をする姿勢は、実は非現実的と言えるのではなかろうか。

無論、宗澤の態度と行為に対する評価は、立場や視点によってそれぞれである。だが、いずれにせよ、領土の回復ができなかったことで高宗とその側近たちを「懦弱」として責めるより、宗澤を代表とした強硬な態度を持つ主戦派と統治者層との間の温度差に注目すべきであろう。南宋政権成立当初、宗澤は北方軍事力のリーダーという立場で金軍との交戦を強く主張したのに対し、中央政府としては政権の安定を第一に考えなければならなかった。そして政権の安定は、皇帝及び朝廷の権威の確立と、金国との関係を構築する前提である軍事実力に左右される。前者に関して、明らかに高宗と立場が異なる宗澤は助けにはならなかった。また、後者に関しては、次の節で宗澤麾下の軍事力の考察を通して注目したい。

---

(16) 『要録』卷七・建炎元年七月丁未。「先是、上命京城留守宗澤移所拘金使於別館、優加待遇。澤謂二聖在金、欲便行誅戮、恐貽君父憂。若縱之使還、又有傷国体。莫若拘縶於此、俟車駕還闕、登樓肆赦、然後特從寬貸。及是詔下、澤上奏曰、『臣不意陛下復聽奸臣之語、浸漸望和、為退奔計。…又令遷金使別館、優加待遇。不知二三大臣於金人情款何如是之厚、而於国家訐謗何如是之薄也？臣之朴愚、必不敢奉詔、以彰国弱。……』詔答曰、『卿彈壓強梗、保護都城、深所倚仗。但拘留金使、未達朕心。』澤猶不奉詔。」

## 第二節 東京留守司が擁した軍事力の性質

宗澤は知開封府、東京留守を歴任し、彼を推薦した李綱が失脚させられた後も、地位をとくには揺るがされることなく、引き続き東京留守として、開封で軍事力の増強及び両河地域の経略に力を注いでいた。そして、東京留守司に帰順した各種武装勢力は金軍に対抗する上で有用であることを、行在の開封帰還を促す上奏の中で繰り返し強調した。実際、史料にも、金軍は宗澤とその麾下の軍事力を憚り南下を控えたという記述が散見する<sup>(17)</sup>。だが、宗澤の報告と催促は高宗に認められず、江南へ撤退した行在は、二度と開封に戻る事がなかった。この事実は、現代の研究者に非難される北方地域の放棄につながり<sup>(18)</sup>、南宋政権の「江南政権」という性格の裏付けとされた。

しかしながら、宗澤麾下の軍事力は実際、どのような性質を持ち、その実力は如何なるものだったのか。この問題は南宋の軍事力を考える上の重要な一環である。その解決に向け、本節はまず、東京留守司の軍事力の構成に注目したい。

南宋政権は基本的に、北宋の軍事システムを継承した以上、北宋末の正規軍の崩壊及びその崩壊によって生じた一連の問題も受け継がざるをえなかった。その状況の中で、成立当初の南宋政権は、軍隊の再建のために、潰散した兵士の再組織に迫られた。しかし、現実には、この時期のいわゆる潰散兵士は、義軍、盗賊などとは確固とした区別がつかず<sup>(19)</sup>、政治的な立場も曖昧で、史料記述の中で用いられる名称で簡単に区別するのは困難である。

宗澤麾下の軍隊は、最初は上述のような区別が困難な潰散兵士と盗賊で構成されていた。その人数は、建炎元年（靖康二年、1127）二月の時点で、合わせて二万六千人ほどに達していた<sup>(20)</sup>。注意すべきは、この二万六千人は、正確に言えば大元帥府に所属していたということである。当初、康王が兵馬大元帥に任命されたのと同時に、知磁州だった宗澤も副元帥に任命されたが、前節で述べたような、対金態度をめぐって康王集団との隔たりが大きかったため、大元帥府が成立して間も無くから、河北で単独行動をとっていた。その際、宗澤はどれほど兵士を連れていったのかは不明だが、大元帥府＝初期南宋政府にとっての軍事力の重要性を考えれば、大人数の軍隊を宗澤にあずける可能性は低いだらう。とすれば、その後の東京留守司兵力の増強は、殆ど別の人員構成により実現された。そのことについて、『宋史』には以下の記述が見られる。

真定・懷州・衛州あたりでは、敵の兵力がかなり集中しており、（彼らは）密かに兵器を

(17) その一例として、『要録』卷十三・建炎二年二月己巳、宗澤の麾下の将官である張撝・王宣が相次いで滑州で金軍と激戦した経緯を記し、「金自是不復至東京矣」と述べた。

(18) 前掲注(5)、注(6)を参照。

(19) 前掲注(8)黄寛重『南宋時代抗金の義軍』第二章第二節「初期義軍の組織と性質」を参照。

(20) 『要録』卷二・建炎元年二月癸未。

用意し、攻撃の準備をしているのに、(宋側の)将相は平然として心配せず、(その状態を)宗澤は憂えた。(そのため)黄河を渡り、諸将領と面会して(防衛の)ことについて議論し、(両河領土の)回復を図ろうとした。そして京城の四つの城壁にそれぞれ代表を設置し、招集してきた兵士を彼らに統率させた。また、地形の有利を頼りに、城外に二十四箇所の障壁を建て、河に沿って連珠砦を次々と並べ、河東・河北の山水砦の忠義民兵(の拠点)とつなぎ合わせた。こうして陝西・京東西の各路の勢力は皆宗澤の統轄に入ることになった。<sup>(21)</sup>

宗澤がいつ河北に赴いたのかについては、『宋史』には説明がないが、『要録』によれば、それは建炎元年九月七日甲午であった<sup>(22)</sup>。金軍が用意周到であったのに対して、南宋側の武将や政府官僚の無防備であったことに憂慮する宗澤は、自ら黄河を渡り河北の諸将領たちと面会したり、開封の防衛を固めたりし、一見すれば効果的な防衛線を構築した。ここで問うべきは、この防衛線の構成の中身、つまり人員である。『宋史』で語られた、宗澤が河北で会った「諸将」は、『要録』には「河西忠義統制」とされている<sup>(23)</sup>。忠義統制という官職は、『宋史』の「職官志」には見当たらず、筆者が見た限り、宋代を通じて、南宋初期の建炎年間と後期の寧宗嘉定年間に数人の地方武装勢力のリーダーが任命された程度であった<sup>(24)</sup>。つまり正式な武官職名ではなく、自発的に集まり、あるいは宋側に帰順してきた「義士」に与えた肩書きであると思われる。また、両河地域の山水砦の利用も、各地方武装勢力の組織を変更することなく、地方武装勢力の本来の形を維持したまま、防衛線として利用した。このようなあり方は、地方勢力の反発を招くことが殆どないというメリットがあった。しかしその一方、機動性を要する金軍との戦闘の中で、他の宋側の軍隊と連携して中央政府の防衛などに用いることはほぼ不可能であったという欠点も指摘すべきであろう。

また、史料上の制限により、どの程度全般的に当てはめることができるかは不明とせざるをえないが、宗澤が東京留守として、開封で集めた軍事力の一部の出処に関して、『宋史』の「宗澤伝」はこのように伝えている。

王善というものは、河東の巨寇であった。七十万人と車万乗を有し、京城を拠点にしようとした。宗澤は一人で王善の駐屯地に赴き、泣きながら王善に「朝廷が危ない時に、もし一人や二人、あなたのような人がいてくれたら、(今のような)憂患があるものか。今はあな

(21) 『宋史』卷三六〇「宗澤伝」。「真定・懐・衛間、敵兵甚盛、方密修戦具、為入攻之計、而将相恬不為慮、不修武備、澤以為憂。乃渡河、約諸将共議事宜、以圖收復。而于京城四壁各置使、以領招集之兵。又据形勢、立堅壁二十四所于城外、沿河鱗次为連珠砦、連結河東・河北山水砦忠義民兵。於是陝西・京東西諸路人馬咸願聽澤節制。」

(22) 『要録』卷九・建炎元年九月甲午。

(23) 同前掲注(22)。「…(宗)澤乃自游家渡過河、会河西忠義統制等議所宜。」

(24) 『要録』卷三六・建炎四年八月戊子、同卷一九六・紹興三十二年正月戊寅、『宋会要輯稿』兵二之二・嘉定十一年三月十四日、同七月十一日。



たが功績を挙げる好機で、それを見逃してはいけない。」と言った。王善は感泣して「ぜひ力を尽くさせていただきたい。」と言った。それで鎧を脱いで宗澤に投降した。その時、楊進（という者は）没角牛と称し、兵三十万を率い、王再興・李貴・王大郎らはそれぞれ数万人を有し、京西・淮南・河南北を行き来して、略奪して患禍となっていた。宗澤は使者を派遣して、彼らを（道理で）説得し、皆を投降させた。<sup>(25)</sup>

「宗澤伝」による上述の記録は、誇張の色彩が濃厚で、特に王善が有する「七十万」人や、楊進の「三十万」人などは、明らかに信憑性が疑わしい。あるいは、それほど的人数がいたとしても、防衛や攻撃に使える兵力はほんの一部に過ぎなかった、というのが事実に近いだろう。また、人数の問題はさておき、王善の出身や経歴を遡れば、彼はかつて「民兵の首領」として大元帥府に帰順したが<sup>(26)</sup>、精鋭のみを選び残して御前正規軍に隷属させようという黄潛善・汪伯彦の計画の中で選ばれず、罷免されたということが分かる<sup>(27)</sup>。軍事力が成立・安定の保障になる南宋朝廷が、なぜあえて選別を行ったのかに関して、史料には明記されないが、軍隊の質を保とうという思惑と、何より、財政上の問題が背景になっただろうと推測できる。いずれにせよ、正規軍に選別されなかった時点で、王善は朝廷直属の軍事力になることができないという判断が下され、そのような人が皇帝や政権中枢官僚の信頼を得ることは難しいだろう。

このような紆余曲折があったことを、宗澤が知っていたかどうかは不明だが、『要録』に収録された宗澤の上奏文は、彼は東京留守司の軍事力を高く評価していたことが窺える。

（宗澤）また曰く、「…私が見たところ、最近（東京留守司に）招安された丁進という者は十万人（を率いて）、陛下のために京城を守ると願っている。また、李成は（陛下の）開封帰還の護衛に充てられ、そして黄河を渡って強敵を全て殲滅しようとしている。また、没角牛楊進らは百万人を有し、同じく彼らを率いて河を渡り、二帝を迎えようとする。…」<sup>(28)</sup>

このように、宗澤は招安された丁進・李成・楊進などを、高宗の開封帰還、ひいては金との戦い及び徽宗・欽宗の奪還のための軍事力になると認識していた。しかし実際、丁・楊二人はそれぞれ「十万人」、「数万人」<sup>(29)</sup>の武装集団を率いて留守司に投降した「賊」である<sup>(30)</sup>。雄州帰信県の弓手だった李成も、最初は数万人を率いて河北招撫使張所の下へ帰順し<sup>(31)</sup>、転々として宗澤の

(25) 『宋史』卷三六〇「宗澤伝」。「王善者、河東巨寇也。擁衆七十万、車万乘、欲拋京城。澤単騎馳至善營、泣謂之曰、朝廷当危難之時、使有如公一二輩、豈復有敵患乎。今日乃汝立功之秋、不可失也。善感泣曰、敢不効力。遂解甲降。時楊進号没角牛、兵三十万。王再興・李貴・王大郎等各擁衆数万、往来京西・淮南・河南北、侵掠為患。澤遣人諭以禍福、悉招降之。」

(26) 『要録』卷一・建炎元年正月丙辰。

(27) 『要録』卷五・建炎元年五月甲午、同卷七・建炎元年七月庚寅。

(28) 『要録』卷十五・建炎二年四月己巳。「且言、……臣竊見近日有招安到丁進者数十万衆、願為陛下守護京城。又李成願扈從還闕、即渡河剿絶強敵。又没角牛楊進等領衆百万、亦願率衆渡河、迎取二聖。…」

(29) 『会編』卷百十七・建炎二年八月條・引『林泉野記』。

(30) 『宋史』卷二十四「高宗本紀」・建炎元年十一月、卷二十五「高宗本紀」・建炎二年二月。

麾下に入った「劇盗」<sup>(32)</sup>であった。上述の王善の経歴と照らし合わせ、このような東京留守司の軍事力に、朝廷が信頼を示さなかったのも、理由が分かるだろう。

無論、かつては盗賊だった出身であっても、その一点のみで、彼らの軍事力としての可能性を否定するわけにはいかない。管見の限り、東京留守司の軍事力に対して、高宗本人は明確にその認識について言葉を発したことがないが、彼らを信頼していないのに、宗澤の東京留守の位を罷免したり、東京留守司そのものを取り消したりしなかったのは、おそらくその「可能性」を考えていたからだろう。しかし、実際の軍事行動を通じて、留守司の軍事力の戦闘力や、他の将領との連携の状況が現された時点で、その「可能性」に対する期待さえ動揺したと思われる。それは、上述に引用された宗澤の上奏と同時期の建炎二年四月に洛陽で起きた戦闘であった。

丙寅、京西北路制置使翟進は河南で金軍を襲ったが、敗北した。その時、御營左翼軍統制官韓世忠は西京に至り、翟進及び大名府路都総管司統領官孟世寧、京城都巡檢使丁進（の軍）と団結して金と戦おうとした。翟進は右監軍完顔希尹の軍營を夜襲したが、金兵に先に知られ、かえって破られた。翟進はまた世忠を文家寺で金と戦わせた。（しかし）その際、丁進は（共に金軍を討つ）約束を守らず、しかも統領官・閣門宣贊舍人陳思恭は後軍を率いて先に退いたため、王師は敗北した。…世忠は東京に戻り、先に退いた者の責任を追及し、一軍は皆左右の足指を斬られ、懲戒を示した。それで世忠は丁進と仲が悪くなり、（両軍の）軍士が毎日のように撃ち合っていた。世忠は兵士が反乱を起こすのではないかと心配し、ついに残りの兵士数千人を集めて南へ帰った。完顔希尹はまた洛陽に入った。<sup>(33)</sup>

この戦いの背景には、洛陽地方で活躍していた義軍のリーダーである翟進が<sup>(34)</sup>、建炎元年冬に金軍に占領された洛陽を奪還しようとしたことがある。もう一人の参加者である韓世忠は後に名が知れ渡る人物だったため、事件の詳細は『名臣碑伝琬琰集』上卷十三「韓忠武王世忠中興佐命定国元勲之碑」に記され、裏付けは取りやすい。他に例えば『会編』卷百十六四月条<sup>(35)</sup>や『宋史』卷三六四「韓世忠伝」などの史料においては、この戦いに関する記録はそれぞれ重心が異なるものの、丁進の軍との仲が悪くなり行在へ引き上げた韓世忠の動きが例外なく記されている。

(31) 『要録』卷七・建炎元年七月丙辰。

(32) 『宋史』卷百六十七「職官七・鎮撫使」。

(33) 『要録』卷十五・建炎二年四月丙寅。「丙寅、京西北路制置使翟進襲金人於河南、敗績。時御營左翼軍統制官韓世忠至西京、會進及大名府路都総管司統領官孟世寧・京城都巡檢使丁進與金戰。進夜襲右監軍完顔希尹營、金兵先知、反為所敗。進又導世忠於金戰於文家寺。會丁進失期、而統領官・閣門宣贊舍人陳思恭以後軍先退、王師敗。…世忠還東京、詰先退者、一軍皆斬左右趾以徇。於是世忠與丁進不和、軍士相擊無虛日。世忠慮有變、遂收余兵數千人南歸。」

(34) 翟氏兄弟の活躍に関しては、黄寬重「地方武力与国家認同：以兩宋之際洛陽地区的方勢力為例」（四川大學歷史文化學院編『蒙文通先生誕辰110周年紀念文集』、北京線裝書局、2005年）を参照。

(35) 『会編』にこの出来事に関する記録は極めて簡単であり、また、その詳細は張匯『金虜節要』からの引用として、五月八日に西京で起きた二回目の金軍との戦いの記録とされ、丁進という名前も、楊進にされるなどの誤記があった。他の史料に照らし合わせた上、本文は『要録』の記述に従う。

無論、皇帝直属軍隊の代表者である韓世忠と留守司の軍官との間で争いが起きたということは一つの事案に過ぎず、簡単に北方義軍全体に敷衍することはできない。しかし、そもそも丁進が出兵の約束を守らなかったこと、そして義軍の兵士が反乱を起こすのではないかという韓世忠の懸念は、二つの集団出身の軍隊の連携が困難であったことを示唆している。確かに、似たようなことは「四大名将」のそれぞれの隷下の軍隊の間にも起きていたが、上記の例の場合、宋軍の敗北だけではなく、韓世忠の行在帰還、そして洛陽回復計画の失敗などの連鎖反応が出現した。それぞれは、軍事行動の中での偶発的な出来事であったかもしれない。しかし、それぞれの敗北の結果が戦局全体、そして戦略に及ぼした影響は、偶然性により軽減されるわけではない。

以上、本節は宗澤の麾下の東京留守司軍事力の中身とその性格について考察を行なった。そこで明らかになったのは、宗澤が頼りになると思っていた東京留守司の主力は、主に背景が複雑な「義軍」で構成され、宗澤の措置の下で防衛線としての機能を果たせたものの、実際、その形態から、軍隊としての機動性に欠けており、また、他の部隊との連携が困難だったということである。金軍の南下に対する恐怖心は、南宋朝廷の政策決定層が開封帰還に躊躇した理由の一つであったと思われる。上述の東京留守司を代表とする北方軍事力の性格も、朝廷の不信感につながったに違いない。そして、北方軍事力の欠点が戦役の敗北という形で現れた時、戦局の変化は必ず政策決定に影響を及ぼすだろう。

### 第三節 杜充の経略の時代：北方軍事力の行き先

宗澤が病死した建炎二年七月に、朝廷は北京留守だった杜充を新たな東京留守に任命し、開封を含む北方地域の経営を一任した。杜充は建炎四年に金軍へ降伏したため、『宋史』では「奸臣伝」に入れられ、また、同じく東京留守として北方地域の経略に携わったからか、史料の記述においてはしばしば宗澤と対照的に扱われ、歴史上厳しい批判を浴びてきた。そうした中、最も頻繁に言及されるのは、杜充は軍隊統轄の才能に欠け、人身の掌握ができず、それが両河の義軍の解体をもたらしたということである<sup>(36)</sup>。

こうした認識に真っ向から反して、朝廷が杜充を任用したのは、実際には彼の才能が理由であった。留守司の現場の状況と、現場を理解しない朝廷の認識がもたらした致命的な差違が朝廷の判断ミスを導いたとすれば、上述したような混乱は理解しやすい。しかし前節で述べたように、東京留守司の軍事力はもともと、出身も性格も複雑な集団である。宗澤がその集団の統轄に成功したとするなら、彼に比べ、杜充はどのような「才能」に欠けていたのか。本節は、宗澤の後任の杜充が東京留守として北方地域を経略する時期の措置、及び杜充と各武装勢力集団との関係に

---

(36) 『宋史』卷四七五「杜充伝」。「澤卒、充短於撫御、人心疑阻、両河忠義之士往往皆引去。留守判官宗穎嘗疏其失、朝廷謂充有威望、可属大事、呂頤浩・張浚亦薦之、故有是命。」

着目し、南宋政府が最終的に北方地域を放棄する政策決定に至るまでの経緯、及び北方地域で集まった武装勢力のその後の行方を究明したい。

『宋史』卷四七五「杜充伝」に、杜充の東京留守の任命についての記述には、このような続きがある。

当時、諸路（の将領は）各々重兵を擁し、みな傲慢で（朝廷の）命令に従わなかった。（ある時）張俊は皇帝に（あることを）報告しようとし、（謁見の）申入れはまだ皇帝の手元に届いていなかったが、張俊はすでに進んで入り、杜充は怒ってその（申入れの）使者を斬殺した。諸将は（このことで）少し敬服するようになった。<sup>(37)</sup>

忘れてはいけないのは、北宋建国以来、かつてないほどに武將に頼る状況の中、武將の統制に頭を抱える朝廷にとって、杜充のような官僚が必要であり、朝廷から見た杜充の「威望」こそが、彼を重用した理由であったと思われる。一方、皇帝や宰相たちの期待を背負った杜充の東京留守司での措置が如何に「間違った」のかは、「両河の義軍の解体」<sup>(38)</sup>のような印象的な事例のほか、具体的な事件として次のような話がある。杜充が東京留守に着任後、かつて宗澤の下に帰順した武装勢力のリーダーと衝突を起こした経緯を、『要録』はこのように述べている。

…（張）用と王善はともに宗澤に招安され、澤が亡くなった後に（留守司を）去った。（杜）充が留守として着任したら、また（杜充に）招安され、張用は京城の南の南御園に、王善は京城の東の劉家寺に駐屯していた。また他の将領である岳飛・桑仲・李宝などは、皆京城の西に駐屯していた。杜充は張用の軍が最も勢力の大きいものとし、それを憚り、張用を降伏させるつもりであった。前日、張用らは食糧の受け取りに開封城に入り、一夜明けたら、杜充はその無防備な時に乗じて攻撃し、城西に駐屯していた諸軍に皆出兵するように命じた。（その動きは）張用に悟られ、兵士を遣わして抵抗し、ちょうどその時王善が兵を率いて応援に来て、官軍は大いに破られ、李宝は生け捕りにされた。<sup>(39)</sup>

王善の経歴は前節で述べたが、張用という人物は、『会編』によれば、相州湯陰の弓手で<sup>(40)</sup>、つまり岳飛の同郷の人物であった。この記述によれば、東京留守司に帰順した武装勢力集団として、比較的实力のある二人である張用と王善は、実は宗澤の死後、自ら留守司から離れ、再び杜充に招安され留守司に集まったことになる。これは杜充の着任により、各所の義士が離れていったという、『宋史』の「杜充伝」が伝える印象は、実情と多少ずれがあると思われる。

(37) 「時諸路各擁重兵、率驕蹇不用命。張俊方白事、謁未入、俊遽前、充怒戮其使。諸將稍稍懼服。」

(38) 前掲注(36)。

(39) 『要録』卷十九・建炎三年正月乙未。「用与王善皆受宗澤招安、澤薨乃去。及充為留守、又受招安、用屯于京城之南南御園、善屯于京城之東劉家寺。又有別將岳飛・桑仲・李宝、皆屯于京城之西。充以用軍最盛、忌之、乃有圖之之意。前一日、衆入城負糧、詰旦、充掩不備、出兵攻用、令城西諸軍皆發。用覺之、勒兵拒戰、會善引兵來援、官軍大敗、李宝為所執。」

(40) 『会編』卷百二十・建炎三年正月十六日。

さらに、杜充は張用を襲う理由をめぐり、彼の勢力が一番大きかったため、杜充は脅威を感じたという『要録』の見解に対して、『会編』はこの事件を記した際、張用の軍は将来「必ず制圧し難からん」<sup>(41)</sup>という杜充の思いを、彼が張用を襲った理由とした。記述に多少の差があるが、いずれからも張用の勢力を制御しようとするという杜充の意図が窺える。内訌とも言えるこの出来事は、経略の失敗について、杜充の才能の無さを裏付けるが、個人の出身や集団の性格が様々な勢力を再び整理する試みも見て取れる。特に、杜充が憚っていた張用勢力を制御するために使ったのは他でもなく、同じ東京留守司に所属する城西の諸軍であったということから、その目的はある程度実現できたと言えよう。この意味では、杜充の目的は朝廷のそれと一致し、結果的には反発と抵抗を招いたが、宗澤の人の心を繋ぎ止める才能とは、もともと形も目的も異なるものであったという点も無視できないだろう。

もう一つ注目すべき点は、杜充は張用が食糧を運びに城内に入った隙間を狙い襲ったことである。食糧や軍餉の支給の不公平による軍人同士の騒擾はこの頃の東京留守司では起きていないことから察するに、張用や王善のみならず、他の統制官たちも皆、留守司が提供した食糧で生計を維持していたと考えるのが妥当であろう。募兵制が一貫された宋代では、食糧の提供は「招安」に付随する条件ではあるが、一方、この事件に関して、『要録』の続きの記録からは、張用・王善側の視点をうかがうことができる。

京城統制官張用・王善は杜充に疑われた以上、部下を率いて去り、淮寧府を攻めた。…そして王善は軍隊を整えて淮寧を攻めようとし、張用は彼を止め、「私たちがこうして集まるのは、ただ食糧が足りないだけだ。国の郡県を攻めるなんてできるものか。」と言った。王善は、「今は天下が混乱し、貴賤貧富の入れ替わる時で、ただの食糧確保だけで満足するものか。…」と言った。<sup>(42)</sup>

この会話から、招安を受ける側の目的の複雑性が窺える。もとより、張用の目的は食糧の確保だったが、王善のそれはより野心的であり、二人の間ですら方向性の食い違いがあった。その後、王善は金に帰順し、その残党の勢力はかなり弱まったものの、その多くは両淮地域で反乱を引き起こした<sup>(43)</sup>。一方の張用は、建炎三年から紹興元年の間、投降と裏切りを繰り返し、一度は岳飛の招安を受け、後にまた張俊の下へ帰順した。一見すると金軍に反撃するのに十分な力になる北方軍事力は、一方的に南宋の味方として金と対立する立場を貫くのではなく、むしろその選択

(41) 同注(40)。「充以用一軍最盛、終必難制」。

(42) 『要録』卷十九・建炎三年正月庚子。「京城統制官張用・王善既為杜充所疑、乃引兵去、犯淮寧府。…於是善整兵欲攻淮寧、用不可、曰、『吾徒所以來、為乏糧耳。安可攻國家之郡縣?』善曰、『天下大亂、乃貴賤貧富更變之時、豈止于求糧而已?…』」

(43) 『要録』卷二十九・建炎三年十一月乙巳。「先是、王善自淮寧分軍由宿・毫而南、無駐兵之地、遂犯廬州。聞金人至、乃移屯于巢縣、既又以其衆降金。遂拘善於軍中、尽散其衆。其將祝友、張淵輩各以所部行。自是兩淮皆被善余黨之擾矣。」

が、時には南宋にとっての不安定要素になるということを、この内訌は端的に表している。

なお、この事件では脇役だった岳飛だが、数年後にあまりにも有名になったことは、王善・張用らのその後の経歴とは対照的であった。東京留守司の統制官として、岳飛はかつて王善・張用と同じ立場にいたが、各人のその後の人生を知ってから振り返れば、所謂「中興の名将」や「英雄」を育んだ土壌は、実は「賊」や「叛乱者」と同じものだったと言える。それは、戦争や政権の崩壊・再建による極度な混乱と活発な流動性という背景に根差している。また、史料の「官軍」、つまりは王朝の正規軍という言葉が使われた対象を見れば分かるように、この極度の混乱の中、「官軍」にしろ、「寇賊」にしろ、実に可変的な定義であり、出身や経歴と関係なく、特定の時点における立場の方が決定的であろう。

この内訌について、南宋朝廷の態度は明瞭ではなかった。何故なら、それとほぼ同時に、金軍は開封を攻めずに南下し、すでに行在に迫ってきたからである。同じ月の月末、韓世忠の軍は淮陽軍で、劉光世の軍は塩城でそれぞれ敗北し、二月初め、高宗滞在中の揚州に金軍が攻め込み、高宗は慌しく江南へ逃げ、さらには三月三日、苗劉の変が杭州で起きた。

政権自体が崩壊寸前まで追い込まれた事態の前、朝廷は開封で起きた紛争を知ったとしても、介入する余裕もすでになかった。ましてや、夏季の到来により暫定的に攻勢を和らげていた金軍は、同年秋に再び攻勢をかけた。こうした中、南宋政府の軍事は逼迫していたに違いない。行在へ赴き、実質上、北方地域の経略を放棄した杜充は、責任を問われるどころか、直ちに宣撫使置副使・節制淮南京東西路に任命され、さらには守右僕射並同中書門下平章事に昇進し、兼江・淮宣撫使として淮河—長江防衛線の指揮を任されたのも、上述のような軍事的背景があった。宗澤の死後、その下に集まっていた兵力、及び山水砦の形の武装勢力が一部解散したのは事実だったが、それは単なる杜充の「無能」だけではなく、宗澤個人との繋がり消失、各武装集団の目的の複雑さ、東京留守の改任による軍隊統轄方針の転換など、様々な要因が共に働いた結果である。そして同じく重要で、無視できないのは、金軍の攻勢という要素である。言い換えれば、当時の南宋政権は、戦局の行方を決められるほどの軍事力を持たず、南方への撤退と北方地域の事実上の放棄は、政策決定によるものでもあれば、軍事的な選択の結果でもある。

南宋にとって残念なことに、杜充は建炎三年十一月に馬家渡で起きた金と劉豫の斉の連合軍との戦闘の中で敗北した末、まもなく斉に降伏した。杜充に篤い信頼を与え、長江防衛の重大任務を彼に任せた高宗は、信頼を裏切られた上、防衛線を破られ、ついに「朕は杜充を厚遇していたのに、なぜ彼はそのようなことをしたのか」<sup>(44)</sup>と嘆いた。杜充軍の敗北も含めた南宋側の一連の敗北の代価は大きく、高宗本人が海上にまで逃げ回る事態に至った。辛うじてその最大の危機を乗り越えた後も、行在は北上することが出来なかった。その後の防衛線の再構築は、南宋政権に

---

(44) 『要録』 卷三三・建炎四年五月庚戌。「上謂輔臣曰、『朕待充至厚、胡為乃爾。』」

とって次の段階の課題となったのである。

### 終わりに

強力な騎兵戦力の攻勢で滅ぼされた北宋政権の後継者として、南宋政権の南方への「後退」は従来、政策決定層の金軍に対する恐怖心が原因の政治的妥協とされてきた。とりわけ、北宋末に陥落した旧都の開封を拠点にし、集まった義軍の力で金軍に抵抗しつつ、開封への帰還を強く主張していた宗澤に対する後世の評価が高いほど、南宋政権の政策決定層の「懦弱」は様々な批判を浴びせられた。しかし、宗澤の政治的主張、及び東京留守司の下に集まった北方軍事力の実情の分析を通して、南宋政権の北方地域の放棄と南方への後退は、政権中枢の政策決定ではあったものの、その結果に至るまでには、北方地域の軍事力の指揮を取る主戦派の宗澤と、政権の最高政策決定者である高宗（康王）及びその側近たちとの外交面の見解の食い違い、及び構成が複雑な北方軍事力の性格と立場の差異など、複数の要素の影響があったということが分かる。宗澤が行在の開封帰還の保障になりうると強く主張していた北方地域の軍事力だが、実は朝廷直属の軍事力として利用できないという現実を認識していた政権中枢はその軍事力を頼ろうとせず、最終的には北方への帰還を断念したのである。

南宋政権の軍隊再建は、北宋末の戦争で組織が崩壊した兵士や、金軍に抵抗するために蜂起した武装勢力など、各種勢力を吸収する過程だったが、そもそも、その各種勢力とは、お互いに身分の境目が曖昧で、時には重なる部分があり、流動性の強い集団であった。開封に残り北方地域の軍事力の収束に努めた宗澤が集めた集団も例外ではなかった。一見すれば大人数の北方軍事力は実際、地形を頼りにして砦を守った地方武装勢力の集まりに過ぎず、開封の防衛のために機能を発揮できたとしても、機動性に欠けるという特徴は、騎兵戦力を誇る金軍との戦いの中では致命的な欠点になる。また、宗澤の死後、いったん宋朝の統制から離れた武装勢力は、後継の東京留守杜充の招安を受けたものの、目的や立場の差異によってお互いに争い、あるいは他の軍隊と争ったことから、彼らを正規軍に（少なくとも選別せずに）編入する困難さも露呈する。そこには従来言われた杜充の才能の欠如という要因は勿論あったが、各勢力の構成や性格、目的の複雑さこそが根本原因であろう。言い換えれば、東京留守司の宗澤時代は、羈縻の手段で地方武装勢力を繋ぎ止めた段階であり、杜充は一步進んで、彼らの統合を試みたものの、彼らの異なる性格・立場によってつまずき、さらには金軍の再度南下の中で中断され、一部統合した軍事力を率いて行在へ赴かざるをえないという結果になった。

一方の南宋政権中枢の立場から見れば、内部より崩壊した王朝の政権再建と異なり、南宋の政権再建は、崩壊した軍事力の再組織を実現し、そして何より、その軍事力を保障にして、バランスを崩された宋金関係の再構築を図らなければならないという特徴がある。これは宋金両国の関係だけではなく、遼と北宋の滅亡に示唆されていた多国体制の大きな変化にも関わる。旧都開封

への帰還は政権の正当性に関わる大義名分であるにもかかわらず、それを諦めざるをえなかったのは、統治者の金軍に対する恐怖心からのみならず、国の外部では宋金双方の軍事力、国の内部では正規軍の現状や、地方武装勢力の帰趨など、多方面の力関係の角力の結果であった。

本稿が検討した両宋交代期に北方地域で活躍する地方軍事力の性格と立場、及びそれらが成立初期の南宋政権へ与えた影響は、南宋政権の成立・成長過程の中の一環に過ぎず、南宋が正式に臨安を行在に定め、その後紹興和議の成立までの経緯、さらには宋金両国の境界線の決定などは、いずれもその時の両国ないし両国以外の各勢力の力関係のバランスに深く関わっていた。それらの問題は、本稿の検討の続きとして、次の課題にしたい。